

二重視覚システム説と現前性

小口峰樹 (Mineki Oguchi)

玉川大学

知覚は、思考や想像といった他の志向的経験とは異なり、その対象が「現前性の感覚 (the feeling of presence)」(対象がそこに現前しているという感じ) をともなうて経験されるという特徴をもつ。本発表の目的は、認知神経科学において提唱されている「二重視覚システム説 (以下、二重説)」の枠組みから、いかにしてこの現前性の感覚を説明しうるかを検討することである。

二重説によれば、われわれの視覚システムは腹側経路と背側経路という二つの経路によって構成されている。これらの経路は単に解剖的にだけでなく機能的にも区別される。すなわち、腹側経路は主に外界の対象を視覚的に意識することに関わっており、背側経路は主に外界の対象に対して視覚的な運動制御を行うことに関わっている。二重説の提唱者であるミルナーとグッデールは、前者を〈知覚のための視覚〉、後者を〈行為のための視覚〉と呼び、両者の機能的な独立性を強調している。

この二重説に対してノエは次のような批判を展開している。すなわち、二重説は視覚経験についての「画像理論」にコミットしており、このコミットメントは視覚経験のもつ重要な現象学的特徴を捉え損ねる帰結を招く。二重説によれば、〈知覚のための視覚〉は視覚情報を外界中心的な参照枠に位置づけ、それを意識経験の内容として表象する。他方、〈行為のための視覚〉は視覚情報を自己中心的な参照枠に位置づけ、それを無意識的に行われる行為制御のために利用する。ここで〈知覚のための視覚〉は光景を知覚者とは独立な外界中心的な座標において表象するとされており、この点で視覚的光景は一種の「画像」として描出されている。ノエによれば、われわれが運動行為を成功裏に遂行するためには、視覚経験はどれがその標的となる対象であるかを行為制御システムに教えなければならない。だが二重説の理解する視覚経験はこの役割を果たすことができない。なぜなら、〈知覚のための視覚〉は知覚者との関係を捨象した外界中心的な座標において光景を描き出すのであり、光景のなかの諸事物が知覚者との関係でどこにあるのかを告げてはくれないからである。このように、〈知覚のための視覚〉は〈行為のための視覚〉が必要とする事物の自己中心的な位置に関する情報を与えることができない。二重説は画像理論に暗黙裡にコミットすることで、視覚経験が備えるこうした基本的な現象的特徴——行為可能性についての情報を含んだものとして光景を提示するという特徴——を扱うことに失敗してしまうのである。

このノエの批判に対して二重説の側からはどのような応答が可能であろうか。二重説の擁護者であるマッテンは次のような応答を行っている。マッテンによれば、現前性の感覚を担うのはもう一方の視覚システムである〈行為のための視覚〉である。〈行為のための視覚〉は近傍空間にある諸事物を自己中心的な座標に位置づけ、それらの事物を可能的な身体行為の標的として表象する。〈知覚のための視覚〉によって与えら

れる視覚経験は、このように〈行為のための視覚〉の寄与によって現前性の感覚を獲得し、行為可能性に満ちた空間として表象されるようになるのである。

だが、ノエはこの見方に対して次のような再批判を展開している。もしマッテンの述べるように、背側経路の視覚システムが意識経験に対して現前性の感覚を付与する機能を担っているならば、背側経路を損傷した患者は現前性の感覚を喪失し、その視覚経験はあたかも写真を見ているときと同じようなものに変化するはずである。しかし、そうした患者はしばしば自らが何らかの障害を負っていることにすら気づかないのであり、その視覚経験から現前性の感覚が失われているとは考えがたい。

ここで問題の出発点を振り返ってみよう。二重説においては、〈知覚のための視覚〉と〈行為のための視覚〉は外界中心的参照枠と自己中心的参照枠の対比に重ね合わせて理解されている。二重説が画像理論へのコミットメントをとまなうとされたのは、この二重説の標準見解において、〈知覚のための視覚〉が入力情報を知覚者とは独立な外界中心的参照枠において表象するとされているためである。だが、この見方は果たして妥当だろうか。

ここでプリンツによる「意識の中間レベル表象説」を援用しよう。中間レベル説は、知覚的意識の内容を構成しうるのは、階層的に組織化された知覚経路（視覚の場合には腹側経路）のうち、中間レベルの処理段階に位置する表象のみである、という説である。この階層的な処理システムにおいては、入力情報は低レベルにおける網膜部位再現的な二次元的表象から、奥行きをもった視点特異的な三次元的表象へ、そして抽象された視点独立的な表象へと処理を施されてゆく。それと同時に、情報が位置づけられる参照枠も、網膜中心的な参照枠から、眼中心的な参照枠などの自己中心的な参照枠へ、そして外界中心的な参照枠へと移行してゆく。中間レベルにおける表象は視点特異性を残しており、事物は私の身体との関係で位置づけられているとともに、私の視点からみた他の事物との関係においても位置づけられている。情報が視点特異性を離れ、完全に外界中心的な参照枠において表象されるのは、処理がさらに高レベルの段階へと進んでからにすぎない。

以上の見方からすれば、二重説の標準見解のように、腹側経路の情報をもっぱら外界中心的に表象されたものと考えるのはミスリーディングである。腹側経路は最終的には視点独立的で外界中心的な参照枠における情報の表象を可能にするが、意識経験に対応する中間レベルは自己中心的参照枠と外界中心的参照枠が並存しつつ事物を表象している段階である。こうした描像において、知覚経験にともなう現前性の感覚は、背側経路に由来するのではなく、腹側経路に位置する中間レベル表象のもつ自己中心性に由来すると考えられる。このように、二重説の標準見解に含まれる自己／外界中心的参照枠の二分法に対して反省を加えることで、〈知覚のための視覚〉それ自体を最初から現前性の感覚を与える自己中心性を備えたものとして理解しうるのである。

以上の議論からは、志向説と選言説の論争に対して次のような示唆が得られる。本発表が論じたように、現前性の感覚は自己中心的な参照枠における表象内容へと位置づけることができる。知覚の現前性はしばしば選言説に対して有利に働くとされるが、本発表は志向説の立場から現前性の感覚を扱うことが十分に可能であるということを示している。